

<神奈川大学経済学会 50 周年記念講演会> 第 2 回

インド農村における家畜飼養と農業経営

篠 田 隆



【司会】 それでは、これから経済学部経済学会 50 周年の記念講演を始めたいと思います。本学出身者の先生をお呼びしたいという私たちの希望がありまして、篠田先生という大東文化大学で教授をされている先生をお呼びしました。篠田先生は今から 40 年前の 1975 年に本学の経済学部貿易学科を卒業されました。その後、本学の大学院に進学され、修士 2 年、博士 3 年、その後インドに 4 年ほど留学されて、1986 年に大東文化大学の教員になられました。それからもう 30 年近くになるということですね。インド研究一筋で、今でも年に 2 カ月ぐらいいはインドに滞在されています。私も昔、同じところで勉強したことがありますので、篠田さんとは少し顔なじみだということです。私の話がメインではないので、紹介をこれで済ませさせていただきたいと思います。篠田先生、よろしくお願いいたします。

【篠田】 皆さん、こんにちは。篠田隆と申します。ただ今ご紹介いただきましたように、70 代の半ばに本学を卒業しました。このキャンパスを訪ねるのは 30 年ぶりです。外観が大変違い、

びっくりしました。内に入り、上階からこちらに移ってきたのですが、生協食堂でしょうか、あれは全く昔と同じで安心しました。毎日あそこでラーメンを食べていました。若い頃は髪が長かったものですから、よくラーメンを食べると髪の毛が汁に入ったことを思い出しました。

実は、全部合わせてインドでは10年間ぐらい生活をしました。はじめは、食事、シャワーやトイレに慣れるのに本当に大変でした。トイレには紙が全くありませんでしたので、水でお尻を洗うことになりました。カルチャーショックのなか、いろいろと得がたい経験をいたしました。本当はそういう話を主体にすればいいのですが、今日は研究報告というような形で、少し緊張してしまいました。それはさっと流して、現地での生活体験だとか、そういったことについてもお話できるようにしたいと思います。

今日のテーマは「家畜飼養と農業経営」です。パワーポイントを準備しました。最初にどうしてインドに関心を持ったのかを話します。それから、特定の村について調査をしましたので、その詳細を簡単に説明し、経済の変化、社会の変化、2通りの村の変化について話します。結論ではほかの研究と対比させることによって、1つの村だけの調査ですが、全インドの変化とも対応していることを述べさせていただきます。

まず、どうしてインドに関心を持ったのかということなのですが、一言で言うと多様性です。中学生の時から日本というのは金太郎飴を切ったように、みんな同じ、あるいは同じように振る舞わせるような力が働いていることを感じていました。何でもみんな同じようにするんだらうという素朴な疑問がありました。

大学生になると、非常に多様な世界、例えば、アメリカや中国などの多民族国家に関心を持ちました。最終的に行き着いたのが、多様性の極致と言われるインドです。連邦制国家のインドでは、州言語が20以上あります。社会構成も非常に多様で、後で詳しいカーストの話ですが、3000種類以上の区分があります。多様な人たちが集まるので、まとめるのが難しい、あるいは分離の傾向が出てくる、そういう多様性社会から一体何が学べるのかというのが、私の基本的な問題関心です。

これまでいろいろな研究をしました。まず、カーストの中でも最底辺に位置付けられ、便所や

目次

1. 問題関心
2. 調査村の概略
3. 経済構造の転換
4. 社会構造の変化
5. 結論と展望（先行研究との対比）

1. 問題関心

1. 多様なインド社会
(多民族多言語、カースト)の動向分析(遠心力と求心力:何を学べるか)
2. これまでの研究:
 - (1) 清掃カースト研究
 - (2) 経営者研究
 - (3) 家畜研究、農村研究

道路の清掃をしたり、猫だとか犬の死体を回収したりする、そういう仕事を伝統的職業とする清掃カーストの研究をしました。その後、底辺層に焦点を合わせた経営者研究をやりました。インド社会の底辺にいる人たちの経済発展や社会発展にとって、学歴を上げ、公務職に進出することは大切ですが、やはり経営の分野でどれぐらい力を示せるかが、集団の力としてとても重要です。この研究は今でも続けています。

そして3番目、これが今日お話する家畜の研究ですが、このテーマを30年間続けています。家畜は、インド社会の中で非常に重要で、その家畜の研究を通してインドの農村の社会経済構造をとらえることができるのではないかという思い込みでやってまいりました。

インドは非常に大きな国で、日本が9つぐらい入ります。その中でこの丸で囲んだ地域がグジャラートという名前の州です。ダイヤモンド形をしているインドの西側です。ここで私は全部合わせて10年間暮らしました。その間、いろいろな調査をしました。グジャラートは、パキスタンと隣接しています。近くに砂漠があります。ですから砂漠性の気候、乾燥気候の地帯です。農業は乾地農法、つまり灌漑に依存しないで、雨が降った後に作物を植えるという形が一般的です。作物は、モロコシやトウジンビエという雑穀や綿花です。綿花も灌漑がなくても育ちます。あるいは落花生、そういう作物が主体になる地域です。

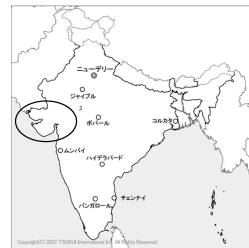
水が潤沢にないところでは、農業発展は制約されますが、家畜、畜産はすごく展開しています。乾地農法の地域で、農業と畜産がどう組み合わせるのかという話をいたします。

グジャラートの中央部の村を選びました。グジャラートの村は、集落、住宅が密集する形態が多く、集村と呼ばれます。これに対して、周りに庭や畑地があって、ずっと離れたところに隣の家がある構造は散村と呼ばれます。もう1つは街村です。例えばネパールの山岳地帯、峻険な傾斜地に道路があって、その道路の片側あるいは両側に家が続いていく形態は街村と呼ばれます。グジャラートでは集村が一般的です。

集村の典型的な住宅の配置は、村の真ん中に位置する寺院の周りに高位カーストの人たちの家があり、その少し外側に中位カーストの人たち、さらにすごく離れた一角に低位カーストの人たちの家が建っています。そして、居住区の側に貯水池があります。その貯水池のそばに井戸があ

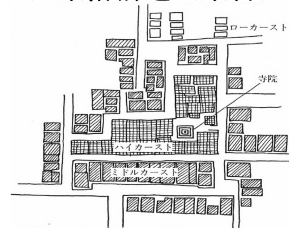
2. 調査村の概略

(1) グジャラート州の乾燥地帯



2. 調査村の概略

(2) 集落構造 (集村)



(出所) 東京大学生産技術研究所・原研究室
『住居集論 - インド・ネパール集落の構造論的考察』1978年、53頁より作成。

り、そこから飲み水を汲みます。貯水池で洗濯をしたり、あるいは沐浴をしたり、洗い物をしたりと、貯水池の周りで日常生活が繰り広げられます。そして畑がずっとこちらに広がっていく、そういう構造です。私が調査した村も全くこれと同様の構造でした。

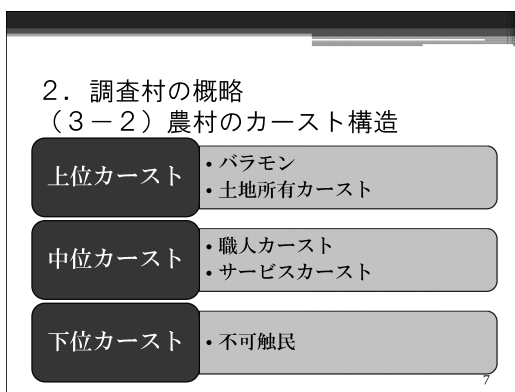
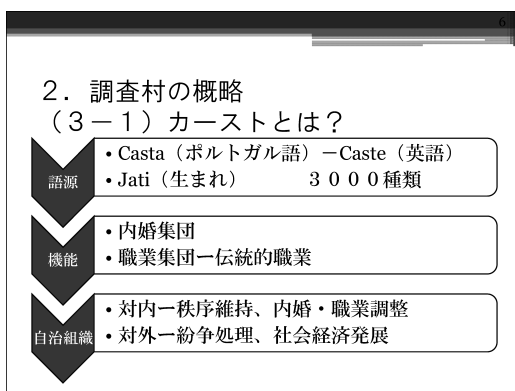
早速カーストの話をしました。やはりインドの社会の話をする時に、カーストについての一定の知識が必要です。簡単に言うと、現在の英語のカーストというのは、もともとポルトガル語の *Casta* という言葉からきました。大航海時代以降、ポルトガル人がインドに上陸をして、インド社会のカーストを *Casta* という言葉で呼びました。それがカーストです。

現地のヒンディー語では *Jati* と言います。*Jati* というのは生まれ、その集団に生まれるという意味です。ですから、私がインド人のあるカーストのメンバーになりたいと思っても、私はその集団に生まれていないので、なれないということです。全インドで 3000 種類の *Jati* が、カーストがあるとされています。

カーストの一番の特徴は内婚集団であることです。そんな馬鹿な、この IT の時代に、世界中にインド人が出ているなかで、同じカーストの人と結婚するのかと疑問を持たれるかもしれませんが。調査があり、現在でもインド人の 80% 以上が同じカーストの間で結婚していることがわかっています。これは非常に興味深い問題です。今日はあまり話しませんが、それぐらいカーストの規定力が、いまだに強いということです。

もう 1 つカーストについて重要なのが、各々のカーストが伝統的な職業を持っているということです。例えば、床屋カースト、鍛冶屋カースト、大工カーストなどです。そういうカーストの職業集団はたくさんあります。ただし、時代によって不要になる職業、あるいは技術が変わり消滅していく、そういう職業もたくさんあります。多くの職業が消滅しましたが、今なお残っている職業もあります。典型的なのが大工、鍛冶屋、床屋、あるいはお寺の番をする司祭です。これらは現在でも残っています。

カーストは結婚集団なので、結婚に関わるトラブルを処理します。また、伝統的職業を見ているので、ある村で鍛冶屋がいなくなり手配が必要になった時に、連絡を取り合い他所から人材をその村に派遣する、そういう機能も持っています。対外的には、村の中のカースト、宗教間で紛争が生じた時に、紛争処理を行う役割の一端をカーストが今でも担っています。



カーストは分業体制だけではなくて、序列の体系でもあります。けがれという思想があり、上下関係に分かれています。通常上位にはバラモン、これは最上位のカーストと言われている人たちで、寺院の司祭やインテリ階級を形成しています。

一番底辺にいる人たちは一般的に触るとけがれるという意味で不可触民、英語では *untouchables*、現地の言葉ではアチュートと呼ばれたりします。この人たちが農業労働力の主要な提供者になっていて、その中間に多数の職人やサービスのカーストがあります。カーストはこういう序列の体系でもあるということです。

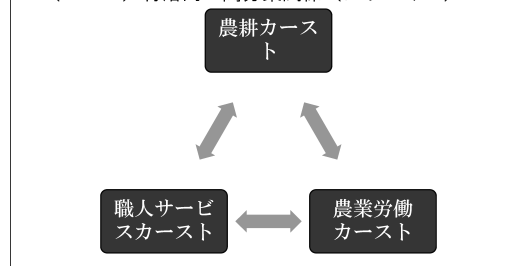
カーストの集団の間で分業関係がみられます。それは村の中の分業、あるいは村と村を越えた村落間の分業でもあります。例えば農民カーストが労働力として不可触民の人に働いてもらう。そうすると賃金を払うわけです。労働を提供して賃金をもらうという形です。また職人・サービスカーストの中には、例えば牛の放牧を請け負う人たちも含まれています。農耕カーストの牛の放牧を請け負い、年間の報酬を穀物の形でもらう、財と労働の授受関係があり、これが村の経済の根幹をなしていく、そういう構造がありました。

私はそういう3つの集団の関係を分かりやすくとらえられるように、選択的に調査村を選びました。その基準のひとつは、農耕カーストの世帯数が多いこと。同時に、家畜の研究ですので、牛飼いかーストの世帯数も多いこと。そして、農業労働力を提供する不可触民の人たちの世帯数も多いこと。このように、3つの集団がそれぞれたくさんいる村を選択的に選んで、この3つの集団の間でどういう分業関係が行われ、それが時代とともにどう変わっていくのか、その中で家畜と農業との関わりがどう変わっていったのかということを焦点に研究をしました。

そして、ざっと見ていただいて分かるように、職人・サービスカーストは陶工（ろくろを回して壺を作る人）、大工（農具を製造修理する人）、裁縫（衣類を作る人）、司祭（お寺を守り祭礼を行う人）、運搬人（ラクダでいろいろな物資の運搬をして賃料を稼ぐ人）や床屋などで構成されています。インドでは床屋は男の人の髭を剃って髪の毛を切るだけで、女性の整髪はしません。インドでは自分の体から出てくるもの、髪の毛、髭もそうですが、自分で処理してはいけな

2. 調査村の概略

(3-3) 村落内・間分業関係（ガラキー）



2. 調査村の概略

(3-4) 調査村のカースト構成

表2: 調査村のカースト別世帯数、人口、平均世帯員数

グループ	カースト	伝統的職業	世帯数	男性数		女性数		平均世帯員数
				労働年齢	全年齢	労働年齢	全年齢	
I	Madoda	農耕	54	120	170	104	173	6.35
	Thakur	農耕	1	1	3	1	2	5.00
	Patidar	農耕	1	1	2	1	2	4.00
	Prajapati	陶工	4	7	10	6	9	4.75
	Subhar	大工	2	2	2	2	2	2.00
	Darji	裁縫	1	1	2	1	3	5.00
	Ravibhan	祭礼	1	2	2	2	3	5.00
	Gosai	祭礼	1	1	2	1	2	4.00
	Bharvad	放牧	24	29	53	31	63	4.83
	Raval	運搬人	1	3	5	3	5	10.00
II	Valand	床屋	1	4	7	1	2	9.00
	Luhar	鋸冶屋	3	4	6	5	8	4.67
	Koli	農耕/農務	6	10	19	11	19	6.33
	Janaki	角うち/農務	2	2	3	2	3	6.00
	Vanhar	織工/縫役	11	17	27	21	33	5.45
III	Serva	縫屋/ドラム/縫役	2	6	7	5	7	14.00
	計		113	210	320	197	336	5.81

(注) ここで労働年齢とは15～59歳の年齢層のことである。
(出所) 筆者の農村調査(1985年3月)

いことになっています。それはけがれる行為だということで、床屋にその処理をしてもらう仕組みがあります。こういう10種類か20種類ぐらいのカーストで普通の村は構成されています。

そのようなカースト構成の村で、家畜の経済がどのように変わったのかをお話しますが、その前に、全インドにどれだけの家畜がいるか説明をしましょう。1951年から2003年までのデータがあります。牛、水牛を合わせたウシ属が1951年で大体2億頭です。それが2003年には3億頭になります。現在のインドの人口が12億人なので、人間4人に対して牛・水牛が1頭いるという感じです。インドの一般的な村の規模は大体4000人ぐらいですから、1つの村に1000頭の牛と水牛がいる勘定になります。石を蹴れば牛や水牛に当たると言っていぐらい、やたらと牛・水牛がいるわけです。それぐらい重要だということです。

ほかにも、インドにはヤギも多いし、ラクダもあります。非常に多様な家畜がいるのですが、今日は寄り道をしないで、牛と水牛に集中してお話をさせていただきます。

これだけたくさん家畜がいるのは、重要だからです。何で重要なのかと言うと、インドの農業に役畜としての家畜が欠かせないからです。日本でも、特に明治期以降、家畜を使うようになりましたが、家畜がいなくても、人力だけの農業も可能なわけです。ところが、インドでは役畜なしでの農業はできません。通常は雄牛を2頭1対で使います。後で写真をお見せしますが、インドの在来種は背中に瘤があります。2頭並べて、瘤の前にくびきをかけます。そのくびきに犁を取り付け、2頭を操って土地を耕していきます。それが農業の根幹です。牛がいなければ、役畜がいなければ農業はできません。その牛をいかに再生産していくのが農業の前提をなしてきました。

もう1つの特徴として、どんなに経営面積が小さくても自分の牛を持とうとする傾向が強いことが指摘できます。乾地農業地帯の調査地でも、初雨の後すぐにタイミングよく播種をしないと、生産量が大きく違ってきます。ですから、タイミングよい播種がとても重要で、ほかの人に牛を借りると、とにかくタイミングがずれてしまい駄目なのです。ですから、土地の所有規模が小さくても、自分の牛をどうしても持とうとするわけです。

その雄牛はどこから来るかと言うと、雌牛が産むわけです。ですから、一定の数の雄の牛を確

3. 経済構造の転換 (1) 混合農業における家畜数

表1: インドにおける雑穀別家畜頭数の推移(1951-2003年)

家畜種類	年度										
	1951	1956	1961	1966	1972	1977	1982	1987	1992	1997	2003
牛	155.3	158.7	175.8	176.2	178.3	180.0	192.5	196.7	204.6	198.8	185.2
雄成牛	54.4	47.3	51.0	51.8	53.4	54.6	59.2	62.1	64.4	63.6	64.5
水牛	43.4	44.9	51.2	53.0	57.4	62.0	69.8	76.0	84.2	89.9	97.9
雄成水牛	21.0	21.7	24.2	25.4	28.6	31.3	32.5	39.1	43.8	46.9	51.2
牛・水牛計	198.7	203.6	226.8	229.2	235.7	242.0	262.4	275.8	288.0	295.4	283.1
山羊	38.1	39.3	40.2	42.4	40.0	41.0	48.8	45.7	50.8	57.5	61.5
山羊計	47.2	55.4	60.9	64.6	67.5	75.6	93.3	110.2	115.3	122.7	124.4
馬・ポニー	1.5	1.5	1.2	1.1	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	0.8	0.8
騾・馱	0.6	0.6	0.9	1.0	1.1	1.1	1.1	1.0	1.0	0.9	0.8
豚	4.4	4.9	5.2	5.0	6.9	7.6	10.1	10.6	12.8	13.3	13.5
鶏	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2
鴨	1.9	1.1	1.1	1.1	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9	0.6
家畜合計	292.8	306.6	335.4	344.1	353.8	369.0	419.6	445.3	470.9	485.4	485.0
家畜	73.5	84.8	114.2	115.4	138.5	159.2	207.7	275.3	307.1	347.6	489.0

(注)「雄成牛」は「牛」の内数、「雄成水牛」は「水牛」の内数である。

(出所) Government of India, Basic Animal Husbandry Statistics 2006, New Delhi: Ministry of Agriculture, 2006, p.74.

3. 経済構造の転換 (2) 家畜の3機能

1) 役畜(一対の雄牛、牛経済の中心、自家所有傾向、過剰牛の原因: 最重要の機能)

2) 用畜(肉、皮、毛、ミルク)

3) 糞畜(厩肥、燃料(牛糞ケーキ))

保するために、多数の雌牛を維持しなければいけない。そのため、雌牛の一番重要な機能は子牛を産むこと、雄子牛を産むことです。ミルクはそんなに重要ではありません。授乳停止後から次の出産までの間、あまり餌をあげません。このため、在来種の雌牛の多くは、あばら骨を浮かせ徘徊していました。30年ほど前には非常に一般的な光景でした。しかも多数の雄子牛を入手するために、雌牛も非常にたくさん飼養されていました。

次の機能は用畜です。家畜からさまざまな製品が得られます。代表的なものをここに示しました。この中でインドでは圧倒的にミルクが重要です。日本や欧米では、もちろんミルクもあるのですが、肉がすごく重要です。ところがインドでは、例えば牛の殺生をせず、聖牛、聖なる牛として見ていく。ですから牛の屠畜はきわめて限定されています。一部の州では、牛の屠畜を禁止しています。ですから、主要な用畜の製品はミルクとなります。

もう1つ、農業との関わりで重要なのが糞畜です。水牛や牛の体重は500キロぐらいです。成牛は1日約10キロの糞をします。皆さんは1日200グラムほどの糞をします。人間の糞は、カロリーが高く重要ですが、インドの場合は圧倒的に大型家畜の糞が重要です。大型家畜の糞を集めてきて肥料として使います。もう1つインドの農村では燃料問題が長らくありました。料理を作る時に牛糞ケーキが燃料として使われてきました。牛糞ケーキは、牛の糞に藁を混ぜて薄く平たくしたものを天日で乾燥して作ります。それを貯蔵室で保管しておきます。料理を作る時にそれを燃料として使う慣行がつい最近までありました。

このように、農業に牽引力として、あと食生活のミルク・ミルク製品として、そして燃料源や肥料源として、農村生活の中心に家畜がいたということです。これが時代とともにかなり変わってきます。今日はその話をいたします。

この30年間、1984年から2015年までの期間、同じ村を毎年訪問してきました。この間、経済構造が大きく変化しました。幾つかの要因があります。その1つが技術革新です。1960年代後半以降、インドに緑の革命が入ってきます。多収量品種（非常に背が低くて実をたくさん付けても倒れないような品種）、化学肥料、そして灌漑がセットになった技術革新です。水をたくさんやり、土地生産性、反収をぐっと上げていく戦略です。アジア、アフリカの人口増加に対応して食料を増産するための技術が確立していきます。

インドだけではなくて、他のアジア諸国でも人口がどんどん増加していく。しかし農地は限られているので、農地に対する人口圧力がどんどん高まっていきます。この結果、農家当たりの経営面積が狭まってきました。特にインドは均分相続制が一般的で、耕地がどんどん細分化して

3. 経済構造の転換

(3) 技術革新

1. 緑の革命（1960年代後半～）

- (1) 多収量品種、化肥、灌漑
- (2) 所有、経営面積縮小への対応
- (3) 飼料基盤の強化

2. 白い革命（1970年代～）

- (1) ミルクの流通革命（農村から都市へ）
- (2) ミルク生産者協同組合の展開
- (3) 社会の攪拌

いくわけです。より狭い農地で昔と同じように食べていくためには、土地生産性を上げるしかないわけです。そういう事情が背景にあったということです。

同時に、緑の革命の結果、家畜を多数飼いたい人は、例えば家畜専用の飼料を集中して栽培していく選択肢も出てきたということです。そして、この緑の革命を背景にして、ミルク生産の革命が展開していきます。1970年代以降、白い革命（白はミルクの色を示しています）が起こります。これはミルクの流通革命です。昔、ミルクは都会では入手が簡単ではありませんでした。農村で生産されるミルクを、都会まで搬送する間に腐ってしまいます。昔は道路も悪いし、保存設備も整っていませんでした。

農村では、ミルクをさまざまなミルク製品に加工して保存していました。一般的な加工法は、ミルクからまずヨーグルトを作り、そのヨーグルトを攪拌機で攪拌します。そうすると、上のほうにバターが浮いてきて、下のほうに酸味のバターミルク（現地ではチャースと呼びます）が残ります。その浮いてきたバターをフライパンで温めると、バター内の水が飛び、水のないバター（無水バター：インドではギーと呼びます）ができます。ギーは腐らないので、数カ月でも保存できます。そのようにしてミルク製品を、ギーの形で保存しました。そのため、都会では慢性的なミルク不足の状態に置かれていました。

ところが都会が発展していく中で、ミルク需要に応えるためにインフラ整備をして、さまざまな関連施設を造っていきます。それが70年代から始まっていきます。同時に、農村で家畜を飼養する生産者を組織化していきます。これが大きな運動になっていきます。それまで農村でミルクを販売しようとする人は、村の商人に値段を買いたたかれていました。そういった旧来の仕組みを正し、社会を攪拌して、不正から正義の方向に持っていくという理念を持った運動が展開していくわけです。

このようにさまざまな技術変革があったのですが、やはり家畜経済に決定的な影響を与えたのは機械化の展開です。トラクターの普及ということです。これは日本でもそうです。同じようなプロセスがインドでも急速に展開しました。インドでは1980年代に入り始めました。トラクターは氷山と同じで、村に1台しか入っていない場合でも、水面下に巨大な体積を持ち、それが村の経済に強大なインパクト、影響力を与えています。

トラクターは、初めは大規模な農家から入っていきます。それから中規模農家が購入していきます。同時に、小規模零細農家で自分ではトラクターを買えない農家もトラクターの影響を受けます。雄牛を維持するのは、餌代をはじめ非常に高くつきます。ですから小規模零細農家のなか

3. 経済構造の転換 (4) 機械化の展開

1. トラクターの普及（1980年代に入り始め、1990年代に急速に普及：大規模農家から）
2. トラクター賃耕の展開（零細・小規模農家から）
3. 雄牛の代替化が進展（調査村から消滅）
4. 雄牛需要減少→雄子牛価格下落→在来種雌牛価格減少
5. 他方、ミルク化の展開（交配種、水牛）

から、雄牛を手放して、トラクターの賃耕で農業経営をする農家がたくさん出てきます。氷山の一角だと表現したのは、トラクターが1台入るだけで村全体が変わるぐらいのインパクトがあるからです。

そして、その過程の中で雄牛がどんどん減少していきました。餌代が高く、トラクターのほうが相対的に安くつくようになります。調査村では2000年前までに雄牛が1頭もいなくなり、私のほうがびっくりしました。雄牛が必要なくなると、雄子牛も要らなくなります。雄子牛を産む聖なる雌牛の価値も低くなります。特に、ミルク産出能力の低い在来種の雌牛は処分の対象にさえなりました。

しかし、同時に、底辺層や零細あるいは小規模の農家の中で、農業収入を補足するためにミルクをどんどん生産して売ろうという動きも出てきます。その時に重要なのが品種の選択です。従来の在来種ではなく交配種（ヨーロッパからのジャージーやホルスタインの外来種と現地の在来種を掛け合わせた品種）やミルク産出量の多い水牛に切り替えていきます。ですから、家畜の種類もこの20～30年の間に大きく変化しました。

そして、このような変化、技術変化、機械化が労働にも影響を与えていきます。1980年代には、年雇が広範な地域に存在していました。年雇とは年間を単位に雇用契約をした労働者という意味です。年雇のほとんどは借金が始まりになっていて、借金を返すまでの間、年間で拘束されていました。

拘束される人は、1日3食、2回のお茶、たばこが提供されました。そして農業労働の中で

も、特に力の必要な耕起、播種、中耕、そういった作業を中心に仕事をしていました。非常に重労働でした。通常の契約の雇用と違い、パトロン－クライアント関係（親方と部下のような主従関係）でした。ですから年雇は、社会的にも尊敬されないという面がありました。実際、調査村では、年雇のほとんどは不可触民でした。調査村の不可触民の1世帯からは、男子3人が、みな別々の農家に年雇として雇われるということがありました。

雇う側からしてみれば、例えば自分が労働できないので年雇にする、あるいは、自分の経営面積を広げるために年雇も活用するなど、さまざまな使われ方がされました。特に経営面積を拡大し農業収入を伸ばそうとする時には、年雇を何人も使い、雄牛もたくさん準備しました。

ところが、機械化とともに雄牛がいなくなると年雇の必要もなくなりました。耕起や播種などの重労働がトラクターにどんどん代替されるので、重労働への労働需要が減少しました。さらに、農村の労働者の労働強度も低下しました。昔の農業はたいへんでしたが、今はすごく楽になりました。

3. 経済構造の転換 (5) 労働の変化

1. 年雇制度の崩壊（借金、年間雇用契約、三食茶タバコ、農業労働（耕起、播種、畜力中耕主体）、パトロン－クライアント関係、不可触民主体、経営面積拡大の要件）

2. 労働日（耕起労働）の減少

3. 労働強度の減少

以上が経済的な変化ですが、同時に社会的な変化も見ていく必要があります。一番重要なのが制度変革と言って、制度を変えることにより社会的発展を促すことです。インドでは政府がさまざまな制度変革を主導しました。制度変革のなかで、特に重要なのが後進階級に対する留保制度を含む優遇措置です。後進階級には、指定カースト、指定部族、その他後進諸階級の3つの集団が含まれます。指定カーストとは不可

触民のことでカースト制度の底辺のグループの人たちを指す行政用語です。指定部族とは、発展の困難な山岳・丘陵地帯に集住する先住民の人たちを指す行政用語です。このふたつのカテゴリーは1950年に発布されたインド憲法で留保制度の対象と規定されています。この他に、州政府の裁量で認定できるその他後進諸階級も留保制度の対象になっています。このように、インドでは歴史的に差別されてきた特定のグループや、山岳地帯に集住し発展から取り残されてきた集団に対してさまざまな優遇措置を率先して与えていく政策をとっています。

こういう集団を優遇することは、政府にとっても重要です。これらは人口の多い集団なので、選挙の際に自分たちの政党の票田になってくれるような期待も働いています。州政府が主導する余剰地分配も優遇措置の一環と捉えることができます。多くの州政府は、余剰地を後進階級の人たちに優先的に配分していく政策を、80年代、90年代に実施しました。分配地は小規模でしたが、それまで農業労働に専従していた世帯のうち、自分で土地経営を始められる世帯が増えました。

さらに、さまざまな融資制度を含む助成制度を充実させていきます。例えば水牛を購入する時に、助成金を50%だとか出していきます。トラクター購入の際にもいろいろな便益を与えて、後進階級の人たちがトラクターを購入しやすくなりました。こういうインパクトが非常に大きかったということです。

先ほど、村落の内部に分業関係があること、その分業関係の中の最も重要な職業はガラキーと呼ばれ、年に1回か2回、サービスの対価として穀物や綿花で支払うという話をしました。1984年から2015年までの30年間、村の中で重要だった職業の中で、存続したもの、消滅したもの、新たに慣行権を持ったもの、いろいろありますので紹介します。

インドの村の分業関係の中で一番強力であ

4. 社会構造の転換

(1) 制度変革

1. 後進階級への土地配分(余剰地)
土地経営への参入
農業労働力から農業経営への移行
2. 融資・助成政策
家畜(水牛購入)→用畜化の展開
トラクター購入→農業経営の促進

4. 社会構造の転換

(2) ガラキー(慣行権)の展開

1. 慣行権の変化(1984~2015)
(1) 存続: ①司祭 ②床屋
(2) 停止: ①大工 ②放牧
(3) 新規: ①清掃
2. 不可触民に対する雑業としての慣行権
(1) 存続: ①家畜死体処理(村外不可触民)
②ダータン(歯磨き用小枝)

り、永遠に残りそうなのが司祭です。つまり、村民とお寺との関係です。村民にとって、お寺を維持することは非常に重要です。そのため、そのお寺に村民が土地（イナム地）を与える慣行が今なお強固に続いています。

床屋も重要な職業です。この村ではまだ床屋は成人男子のいる家に、1週間に1回髭を剃りに、1カ月に1回ぐらい散髪に回ります。1年間サービスを受けて、髭面を単位に男が2人であれば、1人例えば50キロの小麦、2人だと100キロの小麦を払います。小麦を生産していない人も、小麦で払わなければなりません。ですから、わざわざマーケットに行き50キロの小麦を買い、それで支払います。そうしないと、こういう分業関係を現金で行うと崩れてしまうということで、現物が続いているということです。しかし、最近の若い人たちは、ヘアスタイルも何も気にしない村の床屋は嫌だというので、近くの町の美容院に行く人が増えているので、床屋のガラキーはじきに終わるかもしれません。

消滅した職業の典型例が大工です。トラクターが入ってくる前の雄牛の時代には、農具のほとんどは木製でした。ですから、大工は農民にとって一番大切な職人カーストでした。それがトラクターに切り替わるとともに、木でできた農具は不要になっていきました。最終的には、大工は必要でなくなりました。

もう1つ、私が調査した村の事例ですが、村人の牛をガラキーとして放牧していた牛飼いかーストの人たちが、そんなことをするよりも、自分が所有している質の良い水牛や牛の放牧に集中して収入を上げたいという気持ちから、あえて自分たちのほうから放牧のガラキーを取りやめた、そういうケースもあります。

さらに、新たにガラキーの関係ができてくることもあります。調査村の中の不可触民の人たちはすごく団結して政治力を高めているので、犬や猫が死んだりした時に、片付けろと言われても拒絶しています。ですから、村の有力カーストの人たちは、隣の村の清掃カーストの人たちを連れて来て、そういう仕事をさせ、新たに慣行権の関係を築いていくということがあります。

もう1つ重要なのが、こういう村の中の分業関係には非常にブラックな側面もあることです。それは不可触民に対して非常にけがれた仕事、嫌な仕事を課す側面があります。村の中にたくさんいる家畜が死んだ時に、不可触民に家畜の死体処理をさせようとする力が非常に強く働いています。村の中の不可触民がその仕事を放棄した際に、外の不可触民を連れて来たことにも同様の関係が働いています。

もう1つはダータンと言って、インド人の歯ブラシです。小枝を噛んで、その繊維でもって歯の間を梳いて歯ブラシにします。そういった小枝を準備するのも底辺のカーストの人たちの仕事です。

このように、さまざまな変化の中で、後進階級の人たちがまだ苦勞している側面もありますが、新しいチャンスもたくさん生まれてきています。一番大きいチャンスは、トラクター化が進展したことです。機械化の進展が後進階級にとっては、これまでのところ有利に働いているとい

うことです。

例えば従来、牛しかいない時に、農業で収入を増やすためには、経営面積を増やさなければなりません。ところが、経営面積を増やすためには雄牛と労働力が必要です。耕起や播種の労働はきつい労働です。しかも面積を増やそうとすると、1対ではなくて2対の雄牛が必要になります。労働する人数も2人、3人、4人と必要になってきます。このため、貧しい階層はと

てもそんなことができず、チャンスが全くありませんでした。ところがトラクターでの作業では、雄牛の何倍何十倍という効率で耕作その他の作業ができるわけです。資本がそれほどなくても、労働力がそれほどなくても、経営面積を拡大することができます。これはトラクター化の持つ非常に面白い側面です。

さらに、経営面積を拡大するだけではなく賃耕と言って、1アール、1ヘクタールいくらかで耕作してくれないかという声が掛かった時に、それで収入を得ることができます。あるいは、調査村で実際にあったことですが、トラクターを農外目的に利用し、ごみの運搬を1往復いくらかで請け負った事例がありました。このように、トラクターを活用して経済的に上昇する、そういう道が開けてきたということがあります。

同時に、もう皆さんもお気付きのように、調査村の中では後進階級の人たちがどんどん自立化していくわけです。昔は不可触民の人たちが年雇として捕まっていたのですが、年雇から離脱していきます。情勢が変わると、われ先に私はやらないとなります。村人は仕方なくほかの村から年雇を捕まえてくるという過渡期を経て、今は誰も年雇をしていないわけです。また不浄なる雑業や牛の死体を処理しなさいと言われても、拒否するようになりました。

このような社会構造の変化は、家畜関連の施設やネットワークにも影響を与えています。1つは牛を飼うカースト、牛飼いカーストの事例です。衣類も独特で一目見てすぐ分かります。風俗習慣や食べるものも独特です。われわれは穀物や野菜を食べますが、彼らの主食はミルクとミルク製品です。その牛飼いカーストが村にいて、自分が飼っている牛だけではなくて、農民の牛も一緒に放牧し、面倒を見てきていま

した。ですから、農民と牛飼いカーストの間に一定の協力関係や相互依存関係がありました。ところが、この間の経済社会変化の中で、その依存関係が崩れてきました。昔は種牛で種付けをして

4. 社会構造の転換 (3) 後進階級の挑戦

1. トラクター化のインパクト
 - (1) 経営面積の拡大+賃耕(雄牛では不可能)
 - (2) 或いはトラクターの農外活用
2. 後進階級の自立化進展
 - (1) 年雇からの離脱
 - (2) 不浄なる雑業の拒否

4. 社会構造の転換 (4) 家畜関連施設とネットワーク

1. 牛飼いカーストの役割変化(牛飼いー農民関係の希薄化、種牛→人工授精、獣医、在来種→交配種)→放牧慣行権の外部者への販売
2. 雄牛行商の縮小
3. 家畜養護院の再編(「自然死」→「愛玩」)
4. 農村生活と家畜との関わりの変化
 - (1) 中上層農家は農業生産に特化する傾向
 - (2) 女子の家畜飼養労働忌避の傾向

いました。村の中で牛飼いかーストの人たちが独自の種牛を持ち、それを雌牛と一緒にまとめて放していました。そうすると自然に交配するわけです。そのサービスを行ってきました。その種牛は牛飼いかーストのものだったのです。

ところが、近代化の中で人工授精が普及してきました。より効率的で、より品質の良い交配体制に移行していきます。そうすると、種牛の必要はなくなります。お役御免になります。また、牛飼いかーストは牛のことをよく知っているので、牛が病気やけがをした際に、村人の牛の世話をしてきたわけです。ところが、今はすぐ獣医を呼ぶようになりました。家畜に保険を掛けています。ですから獣医を呼んでも、いくらお金が掛かっても保険で治すようになってきています。そうすると、牛飼いかーストのサービスは必要なくなってくるわけです。しかも牛飼いかーストは、信仰との関わりもあり、在来種が主体です。ところが、村人の家畜は交配種に切り替わっていくわけです。ですから、牛飼いかーストと村民間の家畜を通しての相互依存関係は一変してしまいました。

その結果、大変な変化が起こってきています。例えば村の中で牛飼いかーストの人は、村民の家畜と自分たちの家畜も村の共有地の中で放牧をさせてきました。あるいは、畑作の収穫が終わった後、刈り後放牧と言うのですが、刈り株がまだ残っている圃場に放牧をさせてきました。それが大変豊かな飼料源でした。農民と牛飼いかーストの間には、そういった依存関係がありました。ところが、今や農民は牛飼いかーストに全然依存しなくても、自分の家畜の再生産ができるようになったので、牛飼いかーストとの力関係が大きく変化しました。この結果、農民が牛飼いかーストに刈り後放牧を許可する前提として、無料で労働奉仕を課すことが実際に起こってきています。

このように、牛飼いかーストがこれまで享受できた放牧権にさまざまな制約が生じています。さらに極端な事例もみられます。村では農民が政治力を持っています。その農民が、その村の共有地や刈り後放牧する権利をよそからやって来てお金を払う人たちに売却することが、実際に起こっています。そういう大変な状態に今、牛飼いかーストの人たちが置かれているということです。

これも後で写真をお見せしますが、従来の雄牛を主体とした牛経済が機能していた時に、牛を販売するグループが定期的に一定の地域を巡回して雄牛を販売していました。そういうネットワークも縮小、あるいは衰退してきています。

もう1つ、家畜養護院も変化しています。インドではジャイナ教徒やヒンドゥー教のヴァイシュナバ派など不殺生をすごく重視する人たちが、要らなくなった家畜を自然死するまで預かる施設を設けています。現地語ではパーンジュラポール、日本語に直すと家畜養護院となります。最初に不要になった家畜を養護する施設の存在を知った時にはびっくりしました。家畜養護院には、高齢で耕作ができなくなった雄牛、高齢で子牛を産めない、ミルクを生産できない雌牛、病気やけがで経済的に不要になった牛が集まってきます。雄水牛もそうです。水牛はミルクを取る

ために飼養するので、必要なのは雌だけです。雄は種水牛さえいれば、あとは要りません。要らない家畜を家畜養護院に送ります。

不要な家畜は淘汰の対象となります。これはどこの世界にもあることです。インドでは、屠畜という形は取りませんが、死んでいきます。つまり餌を与えない、あるいは餌をほんの少ししか与えない、何か病気になっても全くケアをしないという形で、どんどん死んでいかせます。家畜は経済家畜という側面があるので、その辺はすごく現金な面があります。現金でない面もありますが。

家畜養護院では、家畜を自然死するまで預かります。家畜が入ってきて平均2週間ぐらいで死亡していきます。餌の調整の結果です。ですから、養護院の入口から家畜をどんどん受け入れる一方で、出口から家畜の死体がどんどん搬出されていきます。

そういう伝統的な家畜養護院が現在、大きく変化しています。例えば、海外でインド人コミュニティを形成し、ディアスポラとして拠点を構えている人たちが、常に自分たちのアイデンティティを、自分たちのインド人性、ジャイナ教徒性は何なのかということを模索していきます。そのなかで、インドの雌牛崇拜や家畜に対する崇拜がアイデンティティとの関わりでとても重要な事柄になっています。ですから海外の非常に豊かなジャイナ教徒の集団が、ここに資金援助をして、雌牛をたくさん置いて一種の愛玩動物のように扱っていくような変化も、一部の養護院については見られました。

農村生活と家畜との関わりについても、大変大きな変化があります。昔は、家畜からの収入が重要なので飼養していたのですが、今は家畜を飼うのはすごく大変なので、それよりは農業に集中したほうが収入が多いという判断のもと、上層、中層の農家の間で農業生産のほうに特化する動きが出ています。

もう1つ、これは30年前には考えられなかった変化です。インドの女性の労働状況や労働意識が変わってきています。インドでは、婦女子が家畜の面倒を一番見ています。男はほとんど面倒を見ません。婦女子の家畜の世話のなかで、水や餌の投与のほかに、糞の回収がとても重要です。糞を回収する際に、どうしても生糞が手についてしまいます。インドでも女の人は爪をちょっと長くしています。糞を扱っていると、どうしても爪の間に糞が残ってしまいます。昔はほとんど気にしていませんでしたが、今は非常に気にするようになっていきます。

この結果、実際に家畜を飼う女性の側から、もう家畜の飼養はやめましょうという動きが出てきているようです。昨年8月にインドへ行った時に聞いた話ですが、最近の農村部では、女性側の結婚の条件として、家畜を飼わないことが挙げられるようになっているそうです。それぐらい、家畜の扱いや位置付けが変わってきているということです。

最後に結論と展望を述べます。1つの村の調査でしたが、インド全体との関わりで共通するところがたくさんあるので、先行研究との関わりで幾つかまとめておきます。

第1は、農業機械化、とりわけトラクター化のインパクトはすごく大きかったこと。それが主

なる原因となり、役畜密度（一定の面積にいる役畜の数、雄牛の数）や雌牛密度（一定の面積にいる雌牛の数）が減少しています。これには、地域差はありますが、インドの多くの地域で起こっている現象です。

第2は、家畜所有の階級差が大きく変化したこと。トラクターが普及する以前には、大規模な農家ほど牛、水牛をたくさん所有していましたが、その後の機械化、農業発展のなかで、大規模な農家が畜産から撤退していきます。対照的に、今はむしろ小規模零細農家が追加的な所得源として畜産に参入している状況です。ですから、家畜所有の階級差のありようが全く変わってきました。

第3は、家畜所有が量（頭数）から質へ転換したこと。これも大変面白い変化です。昔は家畜収入を増やそうとする時に、頭数を増やしました。今はそうではなくて、餌の高騰も一因なのですが、頭数よりもどれぐらい質の良い生産性の高い家畜を飼うかが重要になっています。ですから当然、在来種ではなくて交配種、あるいは水牛のほうに移行していきます。家畜の生産性と質が決定的に重要になっています。

以前は雄牛をたくさん飼っていたので、飼料の確保がたいへんでした。雄牛には雌牛の何倍もの粗飼料と濃厚飼料を与えていました。しかし、トラクターの普及とともに雄牛数は減少し、雄牛への飼料負担は軽減されました。その際、それまで雄牛に割り当てていた飼料分を雌牛に振り分けミルクを増産することもできるわけですが、そうはなりません。実際には、飼料作を行っていた土地を、果樹栽培や付加価値の高い農業生産物の栽培に切り替えていきました。このように、飼料基盤はインド全体として強化されませんでした。

貧しい層や零細・小規模農家が家畜を飼うために、村の放牧地や共有地の活用が不可欠です。ところが、そういう共有地は、どこの世界もそうなのですが、経済発展の中で蚕食されていきます。例えば、荒蕪地のような共有地は隣接地に畑を持っている農民がこっそりと切り取り、自分の畑の一角に組み込んでいきます。このように、共有地はどんどん狭まっていきます。これは全世界的な傾向で、インドでもすごい勢いで共有地の縮小がみられました。

このため、特に資源のない人にとって、放牧できる場所がなくなってきています。このため、購入飼料に大きく依存するようになります。購入飼料主体にして家畜を飼育して、ミルクを売るわけです。ミルク価格が良ければ利益は出るし、ミルク価格が相対的に低ければ、損失も出ます。このように、小規模の家畜飼養者が購入飼料に依拠する家畜飼育に切り替わってきたために、酪農が飼料代と乳価の相対価格の動向に決定的に依拠する危うい状況になってきています。

インドの畜産は、2015年の現在、転換期を迎えていると思います。

5. 結論と展望（先行研究との対比）

1. 役畜密度、雌牛密度、農業機械化の関連
2. 農民の家畜所有における階級差
3. ミルク増産の要因（頭数よりも生産性）
4. 飼料基盤の成長鈍化の要因（農業選好）
5. 共有地の縮小と飼料基盤
6. 飼料の市場依存と乳価の動向（危うい関係）

第1に、今まで家畜を飼育してきた女性の一部が家畜飼養を嫌う風潮が出てきています。このように、家畜飼養労働を忌避するという問題があります。最近の2012年家畜センサス（インドでは5年おきに全インドの家畜の頭数を種類別に調べています）のデータも、家畜の頭数が頭打ちの状態になっていることを示しています。

第2に、インドでも、中上流階級を中心に、カロリーを取り過ぎないように食を見直す風潮が出てきています。例えば、ギー（無水バター）はカロリーがやたらと高いので控えるような変化がみられます。もちろん、インドの人口が増加していることに加え、貧しい層はミルクもアイスクリームもさらに消費したいので、インド全体としては、まだミルク製品の需要は伸びていますが、近い将来にその需要が頭打ちになる可能性があります。

第3に、小規模な飼養者の購入飼料に基づく飼養は難しくなってきます。日本の畜産もそうですが、畜産農家の戸数が減るとともに、畜産農家当たりの頭数が増大していきます。そういう傾向がインドでもこれから出てきます。その意味での商業化はすでに始まっており、これからさらに展開してくると思っています。

以上が、30年間通い続けた調査村の家畜経済の変動と、その知見に基づく全インドの家畜経済の動向に関する私の見解です。1村調査の限界はありますが、長期間定点観測ができ、家畜経済の劇的な変動を村人とともにこの目で確認することができました。私にとっての調査村はインドを映し出す鏡のような存在で、村人との交流は何にもかえがたい財産となっています。

堅苦しい話はこれで終わりです。写真をお見せします。

写真1：これは在来種、カンクレージ種の雌牛です。背中に瘤があるのが在来種の特徴です。瘤牛とも呼ばれます。目はアーモンドのように美しく、角は立派です。これは乳役兼用種で、雄は畑で働くし、雌は乳用種には劣りますがミルクを出します。乳役兼用種は調査地では一般的でしたが、最近はミルクをたくさん出さない品種は廃れていく傾向にあります。ですから、カンクレージ種もこれからどうなるかと、心配です。

写真2：これがシンディーと呼ばれる人たちで、特定の地域をぐると回り、雄牛を販売しています。彼らはイスラム教徒です。ヒンドゥー教徒は、去勢をすることを忌み嫌います。ですから、こういうイスラムの集団が雄牛を去勢して、それを販売して回っています。これは1985年に彼らが村に来た時の写真ですが、現在は村に来ていません。

写真3：これが水牛と言われる家畜です。真っ黒いでしょう。ミルクの生産量は在来種の雌牛よりはるかに優れています。在来種の雌牛の3〜4倍ぐらい平均で出します。調査村では水牛も舎飼（厩舎に置き、餌を投与して飼育する形態）ではなく、日帰り放牧（朝放牧に出て夕方戻る形態）で飼養します。

写真4：これが家畜養護院です。収容されているのは在来種の雌牛で、肋骨が浮いているでしょう。これは1985年の写真です。今の在来種は肌のつやが全然違います。同じ在来種ですが、

85年当時と今とでは餌が全然違います。写真の雌牛は2週間ぐらいで亡くなる、そういった牛です。

写真5：乾地農業地帯では灌漑源が非常に乏しいと言いました。その乏しい中での、カッチャーと呼ばれる未舗装施設による灌漑の写真です。水源をコンクリートで固めず、ただ単に穴掘り、そこから水を汲み上げる揚水作業です。土地は決して均平ではなく、高低があるので、小さい区画に区切って、少しずつ水を入れ込んでいきます。

写真6：これは播種の写真です。現地の西インド独特の播種機です。この投入口に種を入れると、そこから5本の播種管に分かれていきます。30センチ幅で5条の播種ができる優れたものです。背中に種を入れた風呂敷を背負って、そこから種を取り投入口に入れていきます。

写真7：これはトラクターの写真です。新品のトラクターを買う人もいるし、中古でうまく農業経営する人たちもいます。調査村では、農業に手慣れた人たちが比較的安い中古トラクターを買って、農業所得を伸ばすケースがありました。日本のトラクターよりはかなり大きく、大体30馬力から40馬力ぐらいです。これぐらい馬力がないと、なかなか耕起できないということです。インドの一部、山岳地帯には日本の豆トラのような小型トラクターも最近は入るようになっていきます。

写真8：これがさっき話したダータン（歯磨き用のブラシ）を製作する若者の写真です。ダータンは要するに木の小枝です。とげが付いているので、とげを取って切りそろえて農家に必要数



写真1. カンクレージ種の雌牛
(2007年)

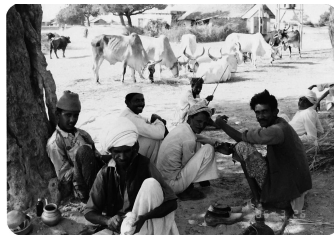


写真2. 調査村に停泊し雄牛を販売
するシンディー (1985年)



写真3. 放牧を終え帰宅する雌水牛
(2012年)



写真4. ヴィーラムガム家畜養護
院に収容された牛 (1985年)



写真5. カッチャー井戸からの揚水
作業 (1985年)



写真6. 雄牛による播種作業
(1985年)

を回します。回して一体何がもらえるかと言ったら、特別な報酬はありません。その代わり、毎晩晩飯を請いに回り、チャパティー（小麦の薄焼きパン）や野菜カレーを少しずつもらったりしています。自分で労働をしたのですが、その対価として賃金ではなく、余り物をもらう関係が、今でもまだ再生産されています。後進階級がいろいろなチャレンジをして変化している側面と同時に、こういう旧態依然とした関係がまだ残っています。

写真9：これは、夕方に放牧を終えた牛の群れが帰村する写真です。牛、水牛は朝9～10時ぐらいに村を出て、夕方5時に戻ってきます。インドの農道は舗装されていないので、多数の家畜と一緒に戻ると、砂埃が舞い上がります。農村の風物詩のひとつです。この放牧者は牛飼いかーストのBharvadの人たちです。牛飼いかーストにもいろいろな種類があり、衣類が違います。ぱっと見てすぐに分かります。

写真10：これは1985年に撮った種牛の写真です。これは牛飼いかーストが持っている種牛で、名前はラージャー（王様という意味）です。私はこのラージャーに村の中で何回も出会っています。種牛なので去勢されていません。体重は600～700キロぐらいあるかもしれません。でかくて優秀なのを種牛にするわけです。種牛には村の中の自由な移動と、立毛中の畑への出這入りが不文律として認められていました。わがまま放題な環境で種付けをしていました。この牛が村の中に戻ってくると村人は狭い通路では建物に張り付き、種牛につつかれないようにしていました。ラージャーには非常に懐かしい思い出があります。しかし、種牛は2000年までに村からいなくなりました。牛飼いかーストと農民の関係だけではなく、家畜の品種、飼養の仕方、人工



写真7. 中古トラクターでの農作業
(2002年)



写真8. ワグリーの若者のダータン
製造作業 (2008年)



写真9. 夕方、放牧を終え帰路につく牛飼いかースト (2006年)



写真10. 牛飼いかースト所有の種牛、名前はラージャー（王）
(1985年)



写真11. 調査村の荒蕪地で解体処分された牛の死骸 (1985年)



写真12. ミルク生産者協同組合のミルク集荷場 (1985年)

授精など家畜の飼養のシステムも大きく変わりました。

写真 11：これは調査村の荒蕪地で解体処理された牛の写真です。歴史的に、こういった解体処分する人たちが皮を取り、あるいは死獣の肉を食べるようになりました。皮をはいで、肉も不可触民の人たちの間で分けるようになると、村の上位カーストの人たちの不可触民に対する蔑みや差別はさらに強くなりました。今でも 3 億頭の牛・水牛がいて日々死んでいきます。その死牛の処理を誰がするのかというのは、本当に重大な問題だということです。

写真 12：これがミルク集荷場の写真です。「白い革命」の中でミルク生産者協同組合が村にできた 1985 年の写真です。ここに来ている人たちは、牛飼いカーストの人々です。ミルクをここに出荷して、計量をしています。当初は、とにかく水を混ぜてかさがたくさんあれば、それだけ協同組合からお金をもらえるだろうと水を混ぜることが横行しました。その後すぐに濃度を検査するようになりました。濃度を検査して、乳脂肪率に応じてお金を払うように今ではなっています。

写真 13：雄牛がいた時代、朝の青草刈りが一般的でした。この女性が頭上に載せている青草包みは多分 30 キロ以上です。これを毎日 1 キロ 2 キロ歩いて取りに行きます。これは、牛を飼っているどこのうちでもやっていた朝の風物詩です。労働は軽減したと話しました。雄牛を扱うだけではなくて、こういった作業を含めてインド農村の男女の労働は大きく軽減されました。

写真 14：これは度量衡のポーズの写真です。村人に長さのポーズを取ってくれとお願いしたら、みんなで体の一部を使った長さのポーズをしてくれました。この半分の人たちはすでに他界されています。文字通り、村人に支えられての調査でした。



写真 13. 青草を抜き取り頭上運搬する村人（1985 年）



写真 14. 身体を用いた長さの単位のポーズ。右側より、ワール（＝ヤード）、カダム（第 1 歩目）、チャール・アングラー、ハート、フィート、ガーズ、マタルーン、タスー、ウェット（1985 年）



写真 15. 調査村の家屋（1985 年）

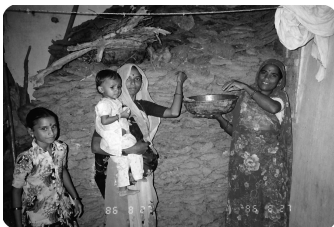


写真 16. どの家にも貯蔵されていた牛糞ケーキ（1986 年）

写真 15: これは 1985 年当時の、村の中で一番高い家の屋根から撮った写真です。こういう瓦屋根、焼きレンガ家がありました。最近はまだ、みんなこういうコンクリートの家に切り替わってきています。ずっと奥のほうに木が見えるでしょう。畑の辻々に木を植えて、農作業の合間、日光が非常に強いので、その木の下でくつろぎます。ですから、畑の四つ角に必ず木を植えています。

写真 16: これが牛糞ケーキの写真です。牛糞に藁を混ぜ、お団子状あるいはケーキ状に手でこねて、天日で乾かしたものです。どの家にも必ず貯蔵庫があり、年間の使用に備えました。牛糞が肥料としてだけではなく、燃料としても大切だったので、自分の家の牛が出す糞はもちろん、道路に落ちた糞も我先に女子供が集めていました。それぐらい燃料や肥料としての牛糞に対する需要は大きかった。現在、牛糞はほぼ厩肥として活用されています。燃料は木材とプロパンガスが部分的に入ってきています。農村の中のエネルギー源もこの 30 年間に大きく変わりました。

以上が与えられましたテーマに関する私の報告です。ご清聴ありがとうございました。

【司会】 何かご質問ございましたら、どなたか。はい、どうぞ。

【質問者】 経済学部で教員をしております奥山と申します。インドの現場に基づいた面白い話を聞かせていただいて、ありがとうございました。1 点だけなのですが、インドの農地集約の現状について。日本ではなかなか土地の売買に制約があつて、農地の集約が進まないところなのですが、インドではその辺り、どのようになっているのでしょうか。

【篠田】 インドでも制約があります。インドの土地集約の制約の一番大きい論点というのが、農業をやっていない人が農地を購入してしまう、あるいは非常に離れたところの人たちが農地を購入してしまう、それをいかに規制するかということが、とても重要な課題になっています。昔、インドの中で不在地主制というのがすごく展開したことがあつて、そういったものを農地の売買の中で、いかに抑止していくというのが主要な関心です。ですから、農民以外が農地を保有することに対して、まず規制を掛けていくということと、あと、居住地からどれぐらい離れているかという距離で規制を掛けていくという、二本立ての規制があります。許容された距離の中での農地の売買というのは農民の間では比較的自由に行われている状況です。

インドの場合は相続制度の問題があり、息子の間で均分相続するので、分散化と細分化がすごく進んでいきます。このため、定期的に何とかしないと、本当に分散化細分化してしまうので、そういう意味での工夫というのが行われているということです。よろしいでしょうか。

【司会】 ありがとうございました。ほかにもうひと方ぐらい、どなたか質問等はございませんでしょうか。

【質問者】 山口と申します。インドでも役畜の牛がどんどん機械に代えられているということなのですが、その場合、インドと言うと牛に対する崇拜、牛を神聖視してきたわけですね。

そういう牛に対する考え方みたいなものも、牛がだんだん農業機械に置き換わっていくことによって、だんだん薄れてきているのでしょうか。あるいは、それは全くヒンドゥー教の宗教の話だから、そういう経済的な変化とは全く変わりなく維持されているのか、そのところをお聞きしたいと思ったのです。

【篠田】 回答から言いますと、薄れてきているというふうには私は見えています。私には、牛飼いかーストの友人がたくさんいます。今日は牛飼いかーストの状況のほんの一部だけお話ししましたが、農民と牛飼いかーストの関係が悪くなっています。以前はそれほど悪くなかった。悪くなかった時には、さっき話したような財とサービスの授受関係だけではなくて、ヒンドゥー教の神話の中で牛飼いかーストが一定の役割を果たすという、そういうストーリー性が農民にも受け入れられていました。牛飼いかーストというのは村民に対して牛を媒介する、そういう役割を担っているのだという理解が農家の側にありました。ですから、逆に何か紛争が起こった時に、私の牛飼いの友人の話だと、そのことを逆手に取って、何でお前たちは神話のなかでの牛飼いかーストの役割を尊重しないのだと言うと、一定の説得力があったという話でした。

しかし、そういう宗教との関わりで牛飼いかースト、あるいは神話の中で牛飼いかーストが位置付けられているような、そういうストーリー性みたいなものが、すごく経済的な現実的な事情の中で、どうしても忘れられ、軽視されていくと考えます。ですから、牛に対する崇拜も薄れていくというのが私の解釈です。

【質問者】 ありがとうございます。

【司会】 それでは時間になりましたので、どうもありがとうございました。

参考文献

篠田隆（2015）『インド農村の家畜経済長期変動分析：グジャラート州調査村の家畜飼養と農業経営』日本評論社